The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞1930-40年代のソ連におけるインド人との個人的出会いの思い出
Author(s)	アントーノヴァ, A. K.; 桑島, 昭
Citation	アジア太平洋論叢. 2014, 20, p. 151-178
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100112
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1930－40年代のソ連におけるインド人との個人的出会いの思い出

K. A. アントーノヴァ*
訳・解説：桑　島　　昭**

年老いて弱っているので、いま文書館や図書館に出かけて自分の記憶を確かめることはできない。人間の記憶力は不確かなので、もちろん、私が意図せずにいくつか誤った発言をしているかもしれないが、それでも、私の思い出は何人かのインド人には興味のあることと思う。

1

1930年12月、20歳でモスクワ大学を卒業した私は、最初の任地、国際農業研究所（MAI）に向かった。この研究所は当初クレスティンテルン（農民インターナショナル）の参考部として設立された。クレスティンテルンが廃止された後も、独自の研究所としての参考部は、コミンテルン（共産主義インターナショナル）のもとで存続を続けた。参考部は、農業やその専門的な知識には関心がなく、その目的は、研究対象となる地域における農民各層の社会的立場を分析し、その国において共産主義革命が起こった場合（世界共産主義革命が差し迫っているという考えは、我々には自明の原則であった）、どの層の農民が工業労働者の同盟者となるか、どの層を潜在的な敵と見なしうるかを決定することであった。

研究所において仕事ができるためには、少なくとも対象となる国の言語と、国そのものについての何かを知らなければならなかった。ロシアのブルジョア

---

*　ロシアのインド史家（1910-2007）
**　大阪外国語大学 名誉教授

知識人といわれている人たちは、全体として共産主義革命を受け入れておらず、それ故、不信の念をもって見られていた。国はみずから共産主義的知識人を作りつつあったが、その結果はまだ現われていなかった。国際農業研究所において、研究者の圧倒的な部分は、国外からの移住者であった。私は英米部門に入れられた。４人の研究者がいたが、その内の２人はアメリカの農民運動を研究していた。もう１人はカナダとオーストラリアを研究対象としていた。４人目の研究者はイギリスの農民・農業労働者運動を研究していた。私は、強大な国、アメリカを研究するグループに加わるよう説得された。もちろん、重要なテーマではあったが、アメリカを研究している者の１人が部門の主任なので、自分が思うようには研究ができないのではないかと怖れた。そこで、自由を求めて、私はほかの者が無視した小国、アイルランドを研究する道を選んだ。のちにわかったことだが、これは正しい選択だった。私は歴史の学生として大学を卒業しており、自分の仕事を変えて、経済学者になるつもりはなかった。アイルランドの農業問題は歴史と深く絡みあっている。そこで、私はアイルランド史の分野で歴史の研究を続けることになった。

この研究所には東洋部門があり、そこで２人のインド人研究者、レザーとアバニ・ムケルジーが働いていた。しかし、私は別の部門にいたので、彼らと接触することはめったになかった。

2

1917年には、ロシアの共産主義革命は世界プロレタリア革命の第一波と考えられた。しかし、時がたっても、ヨーロッパのほかの工業国で革命が起こらなかったので、レーニンは彼の理論を変えた。このことはソ連では言及されることがなかったが、この変更は真に根本的なものであった。世界の工業労働者の指導者は、植民地に同盟者を求め、植民地の何百万人もの被搾取大衆の援助を得ることで、共産主義は力強く巨大都市における革命を鼓舞することになるだろうと言った。そこで、レーニンの死後、1928年のコミンテルン第６回大会は、「植民地・従属国における民族解放運動」という問題を討議した。レザーはこの大

会のインド代表であった。そして、大会後、彼はモスクワに残り、我々の国際農業研究所で働くようになったのである。

ずっと後になってではあるが、私の最良の友人ニコライ・ゴールドベルグは、レザーは彼のニックネームが示すようなムスリムではなく、ヒンドゥーであると私に話した[1]。コミンテルンの代表の多くは、コミンテルンの方針に無条件に服してはいなかった。しかし、彼らの公表された演説は、彼らすべてがそれぞれの国で進行している解放運動を同じように見ているかのように編集されていた。ニコライ・ゴールドベルグは英語、フランス語、ドイツ語を自由に、外国なまりなしに話すことができ、ボルシェヴィキ党のメンバーではなかったが、信頼できる専門家とみなされていた。彼は第6回大会の代表の多くの演説を編集し、そのなかにレザーの読んだ原稿もあった。このようにして、レザーが実際にはヒンドゥーであることを彼は知ったのである。

ロシアに来た政治的移住者の大部分の者はニックネームをつけていた。その結果、再び自国に帰っても、彼らがロシアに滞在して、コミンテルンで活動していたとか、彼らが自国の政府を蔑むような演説をしていたとか証明できなくするためである。彼らにニックネームをつけたコミンテルンの幹部は明らかに特異なユーモアの感覚を備えていた。そこで、たとえば、虚弱で、弱々しく見える若いイタリア人パルミロ・トリアッチは、イタリア語でヘラクレスを意味するヘルコリというニックネームをつけられた。そして、熱烈な民族主義者のアラブ人は、ユダヤ人の姓リーベルマンをつけてロシアで生活しなければならなかった。中国人のゴー・シャオ・タン（郭紹棠）はロシア人のクリモフという姓をつけていた[2]。このコミンテルンの幹部のおなじユーモアの感覚が、ムスリムの名をヒンドゥーにつけさせたのかもしれない。

レザーは、中背、肌は浅黒く、がっしりとして、締まった体躯の男であった。南インドのどこかの出身かと思うが、彼の本当の名前は知らない。

一度、昼食時に、のちにヴォルコンカ通りの友好協会のオフィス・ビルとなった建物の1階にある大きな部屋に皆が集まった。少しくつろいで、よもやま話に興じていた。誰かがガンディーのことを取り上げた。そのとき、私は『プラウダ』紙やほかの新聞に書かれていることを言った。「ガンディーの正体は帝国主義の

手先だ。運動を始めるが、イギリス帝国主義とまともに闘うときになると、ただちに運動を止めてしまう」と。すると、レザーは、私と彼を隔てていたテーブルに手のひらを置き、軽くこの障害物を跳び越えて、私の喉を掴み、締めつけた。部屋の男たちが皆レザーに跳びかかり、彼を私から引き離し、部屋の外に押し出した。私の喉は何日も痛み、研究所のなかを移動する前に、レザーがあたりにいないか注意深く確かめたものである。彼が突然私を襲ったことは、ガンディーの非暴力論を私が理解するのには役立たなかった。むしろ、私はレザーを怖れた。しかし、数週間後、私たちは、彼に狂気の兆候が見られ、精神病院に入れられたと知らされた。これが本当かどうか、彼が逮捕され、姿を消したことを説明するためにこの伝説がでっち上げられたのか、私にはわからない。その後、彼に会ったこともなく、耳にすることもなかった。

3

東洋部門にいたもう１人のインド人はアバニ・ムケルジーである。A. M. パーシッツは、著書の『1918－1921年のソ連におけるインド人革命家たち』(*Indian Revolutionaries in the Soviet Land 1918-1921*) のなかで、コミンテルン文書館の資料を引いて、ムケルジーについて実に多くのことを語っている。パーシッツによれば (88ページ)、ムケルジーはコミンテルンの幹部のために自伝を書いている。この公式の自伝によれば、彼はベンガルの民族主義者であり、ベンガルのテロリストの運動に参加し、逮捕され、シンガポールの監獄に送られた。監獄を脱出した彼は、ヨーロッパに渡り、ベルリンとオランダに住み、その後、共産主義の思想に共鳴し、コミュニストとなり、インド代表として1920年夏に開かれたコミンテルン第２回大会に出席している。これは、ムケルジーが私に語ったことと完全には一致しない。彼は私に、ロンドンで、次いでベルリンでインド史を勉強したと言っている。イギリス植民地の監獄から逃亡した彼が悩まされることなくロンドンで勉強できたかを、私は疑う。しかし、ムケルジーがロンドンで勉強したという事実はまもなく確認された。彼は私を自分の家庭に招待し、私は、ロシア人の妻と２人の色の浅黒い子供たちに会った。私が強い印

象を受けたのは、床から天井にまで届く三つの大きな本棚であり、インドに関して英語で書かれた本でつまっていた。私は棚から何冊かの本を取り出したが、驚いたことに、そこには大英博物館とベルリンの民族学博物館(Museum für Volkerkunde)のスタンプが押されていた。そのとき、彼が普通とはおよそ言えない方法で「蔵書」を集めていることを知ったが、そのことは彼がロンドンで勉強していた事実の確認ともなった。

私がムケルジーに会ったとき、彼は40歳くらいであった。熱烈な革命家のようにはもはや見えず、でっぷりと肥えた典型的なベンガル人バーブーのようであり、腰まわりが広くて双子でも生むかのように見えた。

ムケルジーはマナベンドラナート・ロイと組んでいた。ロイの「右腕」、助力者であり、インドにおけるイギリス支配からの民族解放の運動は急速に共産主義革命に転化するであろうというロイの考えを支持した。この考えは、コミュニストは第1段階では民族ブルジョワジーの解放への努力を支持すべきであり、インドにおけるイギリス支配が打破された後で民族ブルジョワジーに反対する運動を起すべきであるというコミンテルンの理論に反するものである。ロイとともに、アバニ・ムケルジーは、1920年10月17日にインド人移住者によってタシュケントで結成されたインド共産党の創設者の1人である。我々の研究所で働きながら、ロシア語で二つの本、1928年に『農業国インド』(*Agrarian India*), 1929年に『イギリスとインド』(*England and India*) を出した。彼は教養のある人物であったが、共産主義を信奉する彼の思想にはときに奇妙に感じられるものがあった。ムケルジーは、東洋部門の主任イーゴル・レイスネルにたいして陰謀を企てた[3]。私はアバニとはあまり関わらなかった。1933年、ソ連のほかのすべての場所と同様に、我々の研究所でも人々は共産党員の追放を目の当たりにした。私の夫と私は、研究所の何人かの行動について批判的に語っていた。追放が終わると、その人たちが研究所の業務の指導的地位に立った。夫と私は我々の持ち場を捨て、どこかほかの場所に行かなければならなかった。その後しばらくの間、私はアバニ・ムケルジーとは会うことがなかった。

私は、世界経済政治研究所で働くことになり、カナダとオーストラリアの農業問題を研究した。ところで、1935年には共産党員の追放が始まっていたが、

公然とではなく、行政的手続きの形で行なわれた。1904年以来ボルシェヴィキ党のメンバーであった私の母は、1927年に、トロツキスト活動の故に党を追放された[4]。彼女にはいろいろな党派間の相違は決して理解できなかったが、スターリンに反対してトロツキーを助けたと非難された。1927年にデモやトロツキストの宣伝の拡大に加わったといわれた。1935年には、すべてのトロツキストが反革命派、それ故に犯罪人と宣言された。研究所の共産党委員会と研究所の労働組合委員会の委員長は、ともに、トロツキストのシンパを疑われたこともあり、トロツキストを母にもつ私を置いておきたくなかったことは明らかである。彼らは私を追い払いたかったのである。そこである日、廊下の掲示板で突然、「学術研究機関で働く資格がない」ので私が追放されたという通知を読むことになる。この知らせに私は意気沮喪し、研究所のすべての上司のもとにかけつけては泣き叫んだ。ついに、譲歩を勝ち取り、通知の内容が変更された。「自分の意志で」研究所を去ると発表されたのである。

長い熟考ののち、私は、研究活動の資格なしと将来誰にも言わせないために、博士号を取得する決意をした。私は、モスクワ大学歴史学部の「アスピラント」になる願書を出した。ロシア語で、「アスピラント」は最初の博士論文を書く研究生の意味である。

ソ連では、やや特異な高等教育制度があった。高等学校の卒業生は「アスピラント」になることができ[5]、教育を延長して、３年間、少額の奨学金を得る。そのためには入学試験をパスしなければならなかった。「アスピラント」になると、指導を受ける指導教官を選ぶことができた。期間のおわりに、「アスピラント」はもう一つの試験にパスし、そのテーマについて見識を認められている研究所の学術評議会に「ケンディデイト（候補）」論文を提出しなければならない。もしも学術評議会が公開の会議でよろしいと判断し、国家試験監督局がこの決定を支持するならば、「候補」の学位を得て、高等研究所の講師（リーダー）のポストに就くか、研究所で研究員として働き、第二の研究学位、博士号を得ることになる。博士号は自分の努力で手にすることのできる最高の学位である。傑出した学者のみが、当該科学アカデミー全員の審議会の全体会議によってアカデミーの「通信会員」、あるいは、「正会員」に選ばれる。しかし、その幸運は最

も傑出した学者あるいは政治指導者のために留保されている。

1928－31年に私が初めてモスクワ大学に在籍したとき、学生たちは知識獲得の過程よりも政治的議論に関心を持っていた。行政問題では、学生委員会の方が、「ブルジョア分子」と考えられた教授よりも重きをなしていた。そこで、ほとんど何も知らないことを意識しながら、－1935年には、「アスピラント」の定員の４倍もの志望者があって、受け入れは入学試験の結果にかかっていた－前年に大学のプログラムに組み込まれたばかりの研究コース、誰も何も知らない「植民地・従属国の歴史」を選んだ。すでにイギリス帝国内の諸国についての研究を積んでいた私は研究対象としてインド史を選んだのである。このコースの私の試験官はイーゴル・レイスネルとアバニ・ムケルジーである。私はあまり自信がなかったが、２人が難関を切り抜けさせてくれた。しかし、仲の悪い二人は、それぞれ私が自分を指導教官に選んでくれ、自身の立場の強化につながることを期待した。私はイーゴル・レイスネルを選び、アバニ・ムケルジーは私の敵になった。

4

1936年８月、夫と私がヴォルガ河畔のある町で休んでいたとき、突然、共産党の機関紙『プラウダ』で、ジノヴィエフ、カーメネフ、ラデック[6]などボルシェビキ革命をレーニンとともに組織した共産党の主要指導者の公開裁判があるという発表を読んだ。彼らはトロツキストとしての反革命活動を告発された。私の母は彼らすべての人をよく知っていた。このため、この発表を読むと、母のことが心配になった。ただちにヴォルガを離れ、モスクワに行った。モスクワのアパートに着いたとき、品物がすべてひっくり返されていて、政治警察（OGPU）の捜査官によって連れ出されるという母のメモが残っていた。私は、共産党員ではなかったが、母の逮捕を大学の党委員会に報告しなければならなかった。ただちに、ムケルジーは私への攻撃を開始した。

ムケルジーは母を知っていた。彼がインド代表であったコミンテルン第２回大会で、母はレーニンの専門秘書として活動し、２人はそこで会っていたのである。母がバクーで開かれた東洋勤労人民国際大会でエレーナ・スターソワの

秘書を務めたとき、ムケルジーがバクーを経由してインドに帰ろうとしてやって来たと、かつて母が私に話したことがある[7]。私には、どうして地方の政治警察に彼が疑わしく見えたのかわからない。しかし、私の母は、古参の党員として、彼の所持品を調べるよう頼まれたのである。彼の旅行用ケースに15－17メートルのプリントされたロシア製キャラコを見つけた。当時ロシアでどのような布もさがすのが難しいときに、男の旅行用ケースのなかにある15－17メートルのキャラコの意味するものは、ただ一つ、闇取引の犯罪行為である。もちろん、現在の私はそれを馬鹿げた発想と思っている。ムケルジーはただ、ほぼ２－３着のサリーのためエグゾチックなお土産をインドに持っていこうと思ったにすぎない。闇取引の疑いはあり得なかった。キャラコはロシアでは高価であっても、インドでは非常に安かったからである。ともあれ、そのとき、ムケルジーはインドに行かず、モスクワに再び帰ってきた。

『プラウダ』で告げられた最初の公開の政治裁判で、ーのちに、同じような裁判が何度も続いたがー、すべての被告人がもっとも信じがたい犯罪への関与を認めた。最高裁判所主席判事ヴィシンスキーは、「自白は証拠のなかの女王」、すなわち、自白があれば、被告人の犯した罪についてほかの証拠は必要なしと宣言した。ラデックを除いて、すべての被告人は銃殺刑を宣告された。ラデックのみ、「調査への協力」により禁固10年を言い渡された。スターリンの死後、ラデックもまもなく強制収容所で殺されていたことが知られるようになった。

『プラウダ』で発表された公開裁判の開始直後から恐怖の時代が始まった。ソ連は帝国主義の敵に取り囲まれ、この敵はロシア内部にスパイ網、とくにドイツと日本のスパイ網を広げていると宣言された。ロシアの人たちは、疑惑をかきたてる如何なる人物についてでも政治警察に堂々と、あるいは匿名で知らせるよう促された。そうしたすべての「合図」について調査すると。洪水のように告発が続いた。人が消え始める。あなたの友人、知人、仕事の上司が突然消える。政治警察の捜査官は、通常、家族の何人かのために、二つの令状、捜査令状と逮捕令状を持って深夜にやって来る。彼らが２－３時間後に引き揚げると、すべての物がひっくり返され、もちろん、犯罪の証拠は見つからないが、逮捕した者を連れ去っていく。そのときから逮捕された人間は奈落の底に落ちたかの

ようになり、きわめて近い親戚の者以外は彼の運命と起訴について何もわからなくなる。ある朝、勤務先に行ってみると、何年も一緒に働いていた者の１人が突然いないのに気付く、やがて、彼を人民の敵、どこかの外国権力のためのスパイ、国への裏切り者として逮捕、弾劾すると宣言される。もしも、その人物が何らかの要職、部門の長であれば、その要職、部門と関わって仕事をしてきたすべての人が、彼らの真っ只中にいた者がスパイであり、敵であったことをいち早く認識しなかったとして連行され、怠慢行為という罪で起訴される。かくして、１人の逮捕は、その友人・働く仲間・家族の多くの新たな逮捕などに連なっていく。

この恐るべき状況のなかで、大学党委員会のメンバーとしてのムケルジーは、積極的に大学のスタッフを相次いで告発していった。まず、彼はイーゴル・レイスネルを公開の裁判で有罪を宣告されたカール・ラデックとの「結びつき」で告発した。その「結びつき」とは良く知られた事実である。内乱の時期にヴォルガ河艦隊水兵のあいだのボルシェヴィキ・コミッサール（人民委員）であり、のちに著名な作家となったイーゴルの有名な姉ラリサ・レイスネルはかつてラデックと愛人関係にあった。イーゴル・レイスネルはモスクワ大学を去ることを余儀なくされた。次いで、ムケルジーは私に矛先を向けた。彼は、大学党委員会に母と私がいかに親密かを語った。母の友人すべての名を私に報告させるべきだ。そうすれば、委員会は誰が人民の敵に近いかを知るだろうと。私にリスト作成のため一週間の猶予が与えられ、その期間中、夫と私は一緒に話し合った。２人は、名前を挙げても傷つくことのないような人のリストを作成しようとした。最近亡くなった人、すでに逮捕された人、モスクワから長い間いなくなった人など７人の名を書いた。終わりに注意深く次の文言を入れた。「私の母の逮捕は、私にとっても、1919年以来彼女を知っているムケルジー自身にとっても予期しないものであった」。私がこのリストを提出した大学共産党委員会の書記は、このわなにかかり、いつ、どのように母とムケルジーが知り合ったかを私に尋ねてきた。そこで、私はムケルジーの旅行ケースのなかに見つかったキャラコについて話した。これが強い影響を与えたのだろう、私は共産党員でも、コムソモール（青年共産主義者同盟）のメンバーでもなかったが、翌週中にム

ケルジーのインドに関する著作について私の意見を書くよう命じられた。私はほかのすべてのことを脇に置いて、彼の２冊の本を読んで、委員会にそれに関する私の考えを提出した。私は、彼を政治的な過ちで責めることなくーもし、そうすれば、当時の状況では致命的であったー、彼の折衷主義だけを批判したことをそのとき誇りに思っていた。ムケルジーは、自分の歴史についての考えを異なる出典から取り入れ、ときにその見解がたがいに対立していることに気付いていなかった。そのとき、私は自分が生きるために闘っているのだと感じていた。しかし、ムケルジーに不利な情報はまったく出さない方が良かったと、いまにして思う。結局、ムケルジーは大きなゲームの手先に過ぎなかったのだから。

1937年の春、イーゴルと私は電話で連絡し合い、メトロポール・レストランで会うことにした。このレストランではオーケストラが大音響で演奏するので、隣のテーブルで何を話しているか聞かれる心配がなかったからである。そのとき、我々はムケルジーについて話した。彼こそが大学内のこのトラブルを煽り立てたのであり、我々がなんとしても闘うべき相手に思われた。我々には、こうしたテロルのすべてがスターリンによって煽動されているとは考えることもできなかった。ロシアの諺にいわく、「ねずみは、世界で猫以上に強い動物はないと考えている」。イーゴルがほとんど共産党員であり、ー実際、当時必要とされていた２年の試練期間を終ろうとしていたー、かつ教授でありながら、自分が大学から追放されるのをゆるし、党員でもなく、「アスピラント」に過ぎない私をムケルジーに立ち向かわせたとして、イーゴル・レイスネルを責めた。我々は、当時スターリンによって解き放されたテロルの波がレイスネル、ムケルジー、そして私自身の３人すべてを覆ってしまうとは予想もしなかった。しかし、レイスネルと私は２，３年後に大学内の自分の持ち場に戻っている。でも、ムケルジーは逮捕後帰ることはなかった。

レイスネルは家族の友人、イェメリアン・ヤロスラフスキーの助けで逮捕を免れた[8]。しかし、１年以上職がなく、２人の幼い男の子を養うために家具や蔵書を含むすべての物を売り払った。この時代はまだテロルの初期であった。

私は人民の敵の家族の一員としてシベリアのへんぴな場所に無期限で追放さ

れた。私の夫が自発的に私に付いて来てくれ、私を自殺から救った。我々は自分の所持品を荷造りする３日間の猶予を与えられ、政治警察は荷物を駅に届けるために車を貸すことを約束した。本を詰めた箱の上に坐り、猫を膝に抱き、空になった部屋で車を待っているとき、床の上の電話機が鳴り出した。ムケルジーと私との確執を知っている親しい学生からの電話で、ムケルジーが逮捕されたことを知らせてきた。私が流刑になったことを知らなかったので、彼には、サアディーの『ブースターン』から私が引用した一節、「敵より一日でも生き長らえる者は幸いなり」[9]の意味はわからなかっただろう。

当時、レイスネルと私はムケルジーが大学内の迫害の主要な煽動者であると思っていた。いまでは、私は彼に別の光を当てて見ている。ムケルジーは自分の祖国を愛していた。その独立と幸せのために闘った。彼には教養があり、決して「取るに足らぬ人」ではなかった。しかし、私が思うに、彼は「よい人」ではなかったし、彼の態度に非がないわけではなかった。「大粛清の時代」にあって、ムケルジーはほかの無実の人を告発することで自分は無事に逃れようとした。こうしたすべての点を考慮しても、彼の行為は死に値するものではなかったが、実際に彼が得たものは死である。

愛するベンガルからはるか離れた地での恐るべき死。ロシア内部での争いの犠牲者。その争いは、彼に関係のないことであり、彼を関わらせるべきことではなかった。彼のロシア人の妻は迫害を免れたように思われる。1973年に彼女はレーニングラードで生きていたからである。ロシア人には見えない彼の子供たちがその後どうなったか、私にはわからない。これが、ムケルジーと関わった最後である。

5

国際農業研究所で会ったもう１人のインド人はS. ハビーブ・ワファーである。彼は我々の研究所ではなく、ナリマノフカ（ナリマノフ記念東洋教育学研究所を我々はそう呼んでいた）で働いていた。ナリマノフはトランスコーカサスの有名なコミュニスト指導者であり、1925年に死去した[10]。ナリマノフが1930年

代に民族主義的偏向を非難されたとき、研究所の名前が「アベル・エヌキッゼ記念」と変更された[11]。しかし、1939年（1937年以前か？－訳註）に政治局（最高の政策決定機関）のメンバーであったエヌキッゼが、スターリンを古いコミュニストの迫害の故に批判し、彼自身「人民の敵」として名指しされたとき、研究所で長年にわたって発行されてきた多くの教科書に載っていたナリマノフとエヌキッゼの２人の名前が黒い墨で消された。しかし、学生たちは研究所を「ナリマンカ」と呼び続けた。ワファーは、友人のイーゴル・レイスネルに会うために我々の研究所に来ていた。レイスネルは彼からウルドゥー語を学んでいたが、教師としての彼を高く評価していた。また、S. ハビーブ・ワファーはウルドゥー語の作家・詩人としてモスクワでは知られ、彼の本のいくつかはソ連でロシア語に訳されて発行されていた。もちろん、詩人としての彼の資質については私に判断できない。

彼はとびぬけた美男であったと思う。ヨーロッパ人のような顔かたち、背は高く、がっしりとして、黒髪で、ロマンティックな容姿であった。スレンドラ・ゴーパールによると、彼はパンジャーブ人である。私の仕事の関心はインドではなく、アイルランドであったので、あまり話す機会はなかった。話題を見つけることも難しかった。テロルの時代で、ワファーにも非難が浴びせられた。彼は反コミュニスト的傾向を非難されたのである。しかし、私がシベリアから帰ってみると、ワファーはもはやどこにもいなかった。そこで、私は彼がほかの者と一緒に逮捕されたものと思っていた。ずっと後になって、現在はロシア科学アカデミーの指導的会員である彼の息子、アニース・ワファーに会ったとき、S. ハビーブ・ワファーは心臓を悪くして、黒海のリゾート地ソチに療養のために送られたことを知った。わずか数日後に心臓発作で亡くなったとのことである[12]。

アニース・ワファーが比喩的に語ったことによれば、彼の父は、差し迫った逮捕を前にして死ぬことによって自分の命を救った。それだけでなく、S. ハビーブ・ワファーは文字通り家族全員の命を救ったのである。もしも彼が死ななかったならば、彼は逮捕され、次いで彼の家族全員が「人民の敵の家族のメンバー」として迫害されたことであろう。ソチにおいて、彼は名誉ある教師として、有名な作家として世を去り、かくして残された妻と３人の子供に普通の生活が保

証されたのである。彼のお嬢さんは最近亡くなったが、２人の息子はそれぞれの道の専門家となっている。

6

ヒットラーの軍隊がソ連に進攻し、急速な勢いで領土を相次いで占領していった1941年10月、モスクワからの大規模な脱出があった。私もまたモスクワを離れ、タシュケントに向かい、そこで、ウスファン（Usfan)、すなわち、ソ連科学アカデミー・ウズベク支部に入れられた。同時に、秘密裡にタス通信のタシュケント支部で働き始めた。秘密裡にというのは、いたるところにスパイ・マニアがおり、新聞で公表されている以上の情報を持っていると知られれば、政治情勢についての私の発言が秘密情報を基礎としてなされていると類推するのを恐れたからである。たとえ、ローカル紙の記事をただ繰り返しているにすぎなかったにしてもである。したがって、私は自分がタスの無給の勤務者であるのを誰にも知られないよう望んでいた。この仕事は、ほかの国々でロシア情勢について、そして戦争全般についてどう見ているかを知る機会となった。

タスのタシュケント支部は、イランの英軍とイギリスとの間の交信を音声とモールス信号で聞いていた。ロシア語のモールスを知る兵士のグループが我々の所に送られてきて、イランから入ってくるモールス信号を聞き、書き取った。問題は、ロシアの兵士はロシア語のモールス・アルファベットを知っていても、それが英語のものとかなり違っていることである。モールス・アルファベットのこの違いのために、彼らが書き取ったものは関連のない文字の羅列のようで、読むことができない。そこで、まずロシア語のモールス文字を英語と関連づけた後で、書き取ったことを理解することが可能となる。しばらくして、私はこの関連づけの方法を身につけ、兵士がロシア文字で書き取った英語テキストを読み取り、ロシア語に訳すことができた。タスはそのために私の仕事振りに満足した。タスのタシュケント支部で２人のインド人が働いていた。そのうちの１人のロシア語のニックネームがロペスであり、もう１人がリットンである。

ロペスは、中年の静かなシクで、姓はもちろんシン、ファースト・ネームは

覚えていない。モスクワから脱出して来たのでないことは確かである。タシュケントでずっと過ごしてきたと思うが、レーニングラードから移って来たということはあり得よう。おそらく1920年代にアメリカのガダル党からマルクス主義を学びにロシアに来た6人のシクのうちの1人である。しかし、繰り返すが、それも確かでない。

タシュケント支部の長は、アルメニア人のグルジェン・コチャリアンツである。レブソンという名の彼の妻は、タシュケントですることがなく、タスのタシュケント支部のすべての問題に口出しして、タスで仕事をしている者はそれを嫌っていた。

あるとき、タス支部の地方労働組合の集会で、彼女が立ち上がってこう言った。「私はあなた方のためにこれだけのことをしている。パンの配給も増やさせた。それなのに、あなた方は私のことをぶつぶつ言っている」と。すると、ロペスも立ち上がって答えた。「あなたは、良質のミルクをバケツ一杯出すが、後ろ足のひと蹴りでミルク全部を地面にひっくり返してしまう牝牛のようだ」。これを聞いたレブソンは侮辱されたと感じた。ロシアの民話では牛はむしろ愚かな動物と考えられていて、牝牛にたとえられたことを侮辱と受け取ったのである。私は、インドでは牝牛は神聖な動物であり、女性を牝牛にたとえることは絶対に軽蔑ではないと彼女に説明し、幸いにして、このいさかいを収めることができた。しかし、我々が1943年にモスクワに移った後で、彼がどうなったかはわからない。

もう1人のインド人、リットンは、本当はベンガル人で、彼の姓はダッタである。彼は若く、教育をあまり受けておらず、このタシュケント支部でほとんど仕事をしていなかった。モスクワでは、東洋教育学研究所で働いていた。不十分な教育のため言語は教えられなかったが、ベンガル語の会話のレッスンを受け持っていた。自分の言葉で話すのは、もちろん、難しいことではなかった。苦労し、ほかの友人たちの援助も受けて、ついに教育学の「候補」の学位を得て、少なくとも1960年代の始めまで研究所で働き続けた。しかし、その後の彼については私には不明である。

スターリンの死後、そして、フルシチョフのインド訪問後、多くのインド人学生がモスクワのルムンバ大学、モスクワ大学、そして我々の科学アカデミー東洋学研究所にやって来た。その１人、スレンドラ・ゴーパールはモスクワで私の下で「アスピラント」となった。我々は友人となった。そのときからモスクワでインド人を見るのは稀ではなくなった。しかし、いまやまったく新たな時代であり、モスクワには別のタイプのインド人もいる。

（スレンドラ・ゴーパール氏の原注）アントーノヴァ教授（1910年生まれ）はロシアの最年長のインド学者であり、17－18世紀における印露関係史の研究で国際的名声を博した。ロシアのインド研究とその推進への教授の貢献は現世代のロシア人研究者によって認められている。

ほとんど視力を失い、聴力もないに等しいが、彼女の知性と記憶力は明晰である。1999年７月、私が教授と会った際に、この思い出を口述筆記した。

私のインドへの帰国後、原稿をタイプし、送ってくれたアショーク・サッジャンハル氏（I. F. S.；ジャワハルラール・ネルー文化センター（モスクワ）長）とラジェーシュ・クマール博士（同センター・ヒンディー語助教授）に感謝を表わしたい。

注

1 Goldberg, Nikolay Maksimovich（1891-1962）歴史家、1928年からコミンテルンで活動する。アントーノヴァ、A. オシーポフとともに *Novaya Istoriya Indii* (A Modern History of India, モスクワ、1961年刊）の共編者。

2 Go Shao Tang (Crimov)は、郭紹棠（1905-1989)、コミンテルンで活動し、1938年に迫害され、1954年に名誉回復、1955年以降はソ連科学アカデミーで研究活動。なお、この件については、石川禎浩氏（京都大学）と田中仁氏（大阪大学）からご教示を得た。

3 Reisner, Igor Mikhailovich（1899-1958）ソ連のインド・アフガニスタン研究のパイオニア。

4 アントーノヴァの母の名はSophia Mikhailovna。1960年代の前半にソ連で研究生活をしたゴーパール氏によれば、亡くなったのは1964年頃。

5　この説明は、博士への道を志すに際し、研究者としての資質よりも共産党によるサポートが重視された事実にたいするアノトーノヴァの怒りの表われであったと、インタビューを記録したゴーパール氏は理解している。

6　Radek, Karl Bernardovich (1885-1939) ポーランド生まれのユダヤ人。1920-24年、コミンテルン書記。1927年に党追放、30年に復党、1936年に再度除名。

7　Stasova, Elena (1873-1966) 1917-1920年、党中央委員会書記としてレーニンを助ける。スターソワについては、斎藤治子『令嬢たちのロシア革命』岩波書店　2011年　第3章ほか参照。

8　Yaroslavskii, Emelian Mikhailovich (1878-1943) 1905年の革命に参加。10月革命の際のモスクワにおける武装蜂起の指導者の1人。革命後、『プラウダ』の編集などに従事。1930年代にはソ連共産党史の作成に加わる。

9　13世紀イランの詩人サアディーの作品からの一節。最近出された日本語訳の関連部分は次のような表現である。

　　敵の死後、友（恋人）に抱かれる者の
　　安らかな心は実に楽しい
　　敵の死後に、一日でも生き長らえる者が
　　死んでも泣く必要はあるまい

サアディー著、黒柳恒男訳『ブースターン（果樹園）』平凡社　2010年　268ページ。

10　Narimanov, Kerbelay Nadziaf-ogly (1871-1925) 1905年からの共産党員。1922年からトランスコーカサス連邦評議会議長。

11　Yenukidze, Avel' Safronovich (1877-1937) 1899年からの党員。鉄道労働者の出身。共産党を追放されたが、1959年に名誉回復。

12　ソ連科学アカデミー・東洋学研究所で研究をしていたアニース・ワファーには、次の論文がある。

Anis Vafa, "Soviet Scholars on the Problems of Indian History-Researches of the late 1960s and early 1970s", in *New Indian Studies by Soviet Scholars*, "Social Sciences Today" Editorial Board, USSR Academy of Sciences, 1976, pp. 93-108.

解説

桑島　昭

アントーノヴァ教授の回顧の原文は、K. A. Antonova, "Recollection of Personal Encounters with Indians in the USSR in 1930s-40s", *The Social Engineer-A Journal of International Perspective on Development*, Vol. 9, No. 1, January 2000 である。歴史家スレンドラ・ゴーパール氏も加わって、パトナーで活動している研究組織（Association for Social Engineering Research and Training）の機関誌に発表されたものであり、アントーノヴァ教授は「何人かのインド人には興味のあることと思う」と控えめに語ってはいるが、90年の生涯を振り返り、深い悔悟の念とともに、自分自身の苦痛に満ちた経験を1930－40年代のロシア史のなかで見つめ直し、歴史家として記録に残そうとする強い意志がこの回顧には感じられる。アントーノヴァ教授がなくなったのは2007年２月３日であるが、この回顧は、教授の教え子であったスレンドラ・ゴーパール氏に託した後世への「遺言」といえるものである。「インターナショナル」が語られた時代と場所において、何故イランの詩人サアディーの描いた場面が現実のものとなったのか、アントーノヴァ教授の投げかけた問いの意味は重い。このインタビューはロシア語で行なわれているが、ここでは、英語に訳されたものを用いている。

1935年７～８月に開かれたコミンテルン第７回大会は、「植民地における反帝国主義人民戦線」の結成を呼びかけて、従来の「左翼民族主義者」、あるいはインド国民会議派への糾弾を改め、インドの社会主義者や国民会議派内部の左派の側に、ソ連にたいする一定の期待を抱かせたが[1]、アントーノヴァの回顧は、その時期、インド人のコミュニスト・革命家、そして、ロシアのインド研究者をふくめ、ソ連の内部で人々の運命に何が起こっていたか、その壮絶な現実を伝えている。主としてヨーロッパで活動し、1931年からロシアに活動の場を移したヴィレンドラナート・チャトパドヤエが、1937年９月２日、死刑を言い渡されたその日に処刑されたことは、1990年代の始めに、ロシアのインド研究者レ

オニード・ミトロキンによって明らかにされた[2]。　アバニ・ムケルジーも、同年10月28日に処刑されている[3]。ここに訳出した回顧も、ロシアにおける1930年代を見つめる視点の変化のなかで、時代の犠牲となったインド人のコミュニスト、革命家、知識人の活動を、歴史の「当事者」としての苦しみと透徹した歴史家の眼を通して伝えようとしている。

ここでは、アントーノヴァ教授の回顧にかんして、三つの点を注目したい。

まず、アントーノヴァの回想に登場するレザーとアバニ・ムケルジーという２人のインド人のうち、レザーという人物についてはあまり知られていない。アントーノヴァは、コミンテルン第６回大会（1928年７～８月）におけるインド代表としての参加、ムスリムではなくヒンドゥー、南インド出身の可能性を指摘している。しかし、すでにロシアで活動していたG. A. K. ルハーニー(Ghulam Ambia Khan Luhani)、ベンガル労働者・農民党代表を自認し、大会の１年以上前にインドを離れていたサウミエンドラナート・タゴール(Saumyendranath Tagore）を除くと、第6回大会にインドから出席したのは、シャウカト・ウスマーニーをふくむ４人のムスリムであった[4]。もっとも、ムザッファル・アフマドは、彼の回顧録のなかで、この４人がインド共産党の公式の承認なしにモスクワに向かい、のちに資格を取り消されたことを明らかにしている。しかし、レザーがこの大会で演説したことは事実であり[5]、レザーの演説はコミンテルンの機関紙にも掲載された。これに関連して、G.アディカーリーは、レザーの本名がモハンマド・シャフィーク（Mohammad Shafiq）であったことを指摘し、彼の生涯についてもインド共産党資料集のなかで触れている[6]。

これを要約すると、シャフィークは、南インドではなく、北西辺境州ペシャーワル県アコーラー（Akora）に生まれ、灌漑関係の書記を勤めたが、第一次世界大戦後、イギリス植民地インドの抑圧を逃れるムスリムの「ヒズラト」運動に加わり、アフガニスタンのカブールに1919年５月に到着した。翌年始めにソ連からカブールに着いたアブドゥル・ラブ(Abdul Rab Peshawari)とトリムール・アーチャーリヤ（Khandeyam Pratibadi Bhayankaram Trimul Acharya）から、イギリスからの独立のために闘う移民(*muhajirs*)をソ連が手厚く保護し、インドの独立運

動を支援していると聞き、1920年1月あるいは2月にタシュケントに到着した[7]。タシュケントに着いた初期のムハージル・グループの1人である。1920年5月、シャフィークは、タシュケントでウルドゥー・ペルシア語版の最初の1号で終わった『ザミーンダール』(ここでは農民の意味か) 紙を発行し、「東洋の抑圧された人民」にインドの自由と革命への支援を訴えている[8]。英語に訳出された部分に関する限り、イスラームへの言及はない。ちなみに、インドの独立運動と共産党史について著作の多いコミュニストのソーハン・シン・ジョーシュは、ロシアのアーカイブズの資料から、1920年7月18日にモスクワで、シャフィークが、1915年にカブールに成立していた「インド臨時政府」の代表として「閣僚リスト」を発表し、ソ連の支援を迫ったことを紹介している[9]。彼はコミンテルン第2回大会 (1920年7月19日～8月7日) に招かれるが、シャフィークの資格は「ビジター」としてであった。大会後、M. N. ローイ、アバニ・ムケルジーとともに、タシュケントに戻り、インド共産党の結成 (1920年10月17日) に加わり、書記に選ばれる[10]。また、タシュケントに設立されたムハージルのためのインド軍事訓練学校に入り、その後、モスクワの東洋勤労者共産主義大学で1年間学んだといわれている[11]。イギリス当局は、1922年半ばから、タシュケントやモスクワから帰って来たインド人を逮捕し、ペシャーワルで「コミュニストの陰謀」を理由として彼等に判決を言い渡したが、シャフィークも、1923年12月10日に身柄を拘束され、翌年4月4日に「陰謀」の「活動的メンバー」として3年の禁固刑を受けた[12]。釈放されたのは1927年である。

1928年のコミンテルン大会後、どのようにしてシャフィークが国際農業研究所に職を得たのかはわからない。また、コミンテルン内部の事情に詳しいゴールドベルグが、何故、レザーはムスリムでなく、ヒンドゥーであると理解していたかも気になる点である。1932年末、ウスマーニーは、ボンベイから投函されたムハンマド・シャフィークの葉書を受け取っており、そのなかには、ロンドンをふくむヨーロッパの多くの場所を廻ってインドに帰ってきたばかりと書かれていた[13]。シャフィークはこの後政治から離れたというのがアディカーリーの推測である[14]。

インドの外で結成されたインド共産党の書記の職に就きながらも、シャフィー

クの生涯については、現在のところ、ほとんど知られていない。わかっている部分についてもその多くが逮捕されたときの調書を基礎としており、ほかにこれを裏付ける資料は少ない。限られた資料から、アントーノヴァへの暴力的な振舞いは1931～1932年の間に起き、コミンテルン第6回大会インド代表としての資格への疑問も加わって、帰国を余儀なくされたことが考えられる。この大会の討議においては、インド共産党の合法的な窓口となり、現実に大衆運動の接点となっていた各地での労働者・農民党の成立を，ソ連共産党が黙殺し、あるいは、きびしく批判して、強力なインド共産党の建設を訴え、その流れがコミンテルンの方針となった[15]。このことは、シャフィークの行動にも大きな制約になった。アントーノヴァが当時のソ連の原則的な立場を述べたのにたいし、コミンテルン大会で新しい方針に従わざるを得なかったシャフィークは、ムハージル出身の抑えがたい「民族主義」的な不満を私的な会話のなかで爆発させたのであろう。アントーノヴァの回顧は、ムハージルとしてインドを離れ、アフガニスタンを通ってソ連に入り、コミュニストになった人たちの行動の一端を垣間見る貴重な資料である。

レザーと比べ、アバニ・ムケルジーの1920年代前半の活動は比較的よく知られている。それでも、1920年代後半からの彼の活動については、あまりわからなかった。アディカーリーの解説と、とくにゴータム・チャトパドヤエによって書かれた伝記によれば、ムケルジーは、1891年に中央州のジャバルプルに生まれ、カルカッタで教育を受けている間にすでに熱烈なナショナリストとなり、父が彼を民族運動の激震地から離れさせるため、アフメダーバードで織工としてのトレーニングを受けさせた。やがて、ムケルジーはカルカッタで工場の織工長補佐を務め、1910年には日本に渡る。彼の日本行きを促したのは著名な革命家ジャティンドラナート・ムケルジー（Jatindranath Mukherji）であったが、もう一つの「帝国主義国家」を目指す日本に彼はなじめなかったようである。その後ドイツへ赴き、織物技術をさらに磨いている。1912年末の帰国後、カルカッタのアンドリュー・ユール・ミルに就職、のちに、マヘンドラ・プラタープ（Mahendra Pratap, カブールで成立した「インド臨時政府」の大統領）がブリンダーバンに開いた学校で技術の教師となる。1915年、ふたたびジャティンドラナー

トの指示で武器購入を目的に日本に到着した。仏教学者高楠順次郎を通じて東京在住の２人のインド人、ビノイ・クマール・サルカール教授（Benoy Kumar Sarkar）とシバプラサード・グプタ（Shivaprasad Gupta）を知り、彼らを通して日本に来ていたインドの代表的民族主義指導者ラーラー・ラージパト・ラーイ（Lala Lajpat Rai）と会い、彼の秘書を務めたこともあった。また、孫文を通してラーシュ・ビハーリー・ボース（Rash Bihari Bose）と出会っている。その後、バグワーン・シン（Bhagwan Singh）によって上海に送られ、ラーシュ・ビハーリー・ボースからインドに入っての任務を教え込まれる。その活動の途次、1915年９月にシンガポールで逮捕された[16]。

日本の外務省小池政務局長が石原警視庁官房主事に宛てた1915年10月６日付の文書に出てくるMukerjiは、アバニ・ムケルジーのことである[17]。

P. N. Thakurハ先ニ郵船会社汽船八阪丸ニテ新嘉坡ニ向ケ渡航ノ途次逮捕シタル印度人ヨリ得タル証拠及Thakur自身ヨリMukerjiナル者に宛テタル書簡ニ依リ印度ニオケル或重罪犯人トシテ捜査シ居ルRash Bihari Boseナル者ニ該当スルモノト認メラレル趣ヲ以テ・・・

同10月に政務局の作成した「排英印度人ニ関スル調書」には、実際にドイツからインドに武器が到着していたかどうかは別としても、アバニ・ムケルジーの渡印の任務が記されている[18]。

Thakurヨリ新嘉坡ニオイテ逮捕セラレタル印度人Mukerjiナル者ニ宛テタル書簡ニ依レバ独逸ハany amount of money and munitions of warヲ彼等ニ供給スルノ手筈ニテ既ニ印度ニ着シタル分アリ尚廻送ノ途ニ在ル分モアリトノコトナル旨・・・

アバニ・ムケルジーが1917年秋に、休憩時の海水浴中に逃亡し、ボートでジャワに逃れたという説については、様々な疑問も招き、警察の調書作成への協力の故の釈放ではなかったかという批判まで出されたが、アディカーリーは、文

書を提出したことは本人も認めており、脱走劇はムケルジーの大胆な行動によって行なわれたと見ている。また、チャトパドヤエによれば、逃亡時、日本人の漁師によって救われたが、当時の日英同盟を考えた彼らはムケルジーを孤島に残して去り、数日後にインドネシア人のボートによって助けられて、スマトラに着いた[19]。インドネシア滞在中の２年間に、ムケルジーは同地の革命家たちと接触し、その関係を通してオランダに渡り、コミンテルンの指導者の１人、ルトヘルス（Rutgers, Sebald Jusdtius）の信頼を得、ベルリンを経てソ連に入っている。コミンテルン第２回大会には英領インドの代表として出席し、タシュケントにおけるインド共産党の結成にも加わった。1921年12月のインド国民会議派大会には、ローイとともに署名したアッピールを送り、1922年にローイが出した最初の本、*India in Transition*（『移行期のインド』）には「アバニ・ムケルジーとの協力で」（in collaboration with Abani Mukherji）と記されている。ローイとムケルジーとの協力関係はこの頃までで、1922年末からムケルジーがインドで活動したときには、ローイは彼への不信感をインドのコミュニストに書き送っている。アバニ・ムケルジーは、地下活動を通じて、1922年12月にガヤーで開かれた会議派大会の参加者に働きかけ、インド労働者・農民党の結成を呼びかけた。彼がヨーロッパに戻ったのは1924年３月である。アディカーリーは、ムケルジーがその後もおそらくコミンテルンの部署の一つで働いていたと推定しているが、コミンテルンの大会には1924年、1928年とも出ていない。ムケルジー夫人のローザ・フィティンゴフの回顧によれば、アバニ・ムケルジーは1928年に高等教育機関（Institute of Red Professors）を卒業した[20]。1930年代の彼の主要な活動の場はソ連科学アカデミー東洋学研究所であり、ソ連東洋学者協会会長の地位にも就いたとアディカーリーは結んでいる[21]。1914年からの約10年間、アジアとヨーロッパを駆け巡り、そして、インドにまで戻って政治活動の前線にいたアバニ・ムケルジーが何故、研究者の道に入るようになったかについては明らかではない。

第二の注目すべき点は、1935年に改めて大學の研究コースに入ろうとしたとき、アントーノヴァが、「誰も何も知らない『植民地・従属国の歴史』」を選んだと述べていることである。この段階においても、アジア・アフリカ情勢の把握

について、ソ連、あるいは、コミンテルンがいかに国外から移ってきた革命家やコミュニストからの情報に依存することが大きかったかを示している。そのことは、ソ連で活動する彼らが、いかに正確な情報を提供できたか、あるいはそれが可能であったかという問題にも連なっている。レザーの事件はそうした脈絡のなかで起きている。

第三に注目されるのは、アントーノヴァが、ムケルジーの攻撃から自分を守る「生きるための闘い」を強いられながらも、「こうしたテロルのすべてがスターリンによって煽動されているとは考えることもできなかった」と振り返っていることである。1959年にベルリンで出版されたソ連研究者によるインドに関する論文集には、アントーノヴァの三つの論文が収められている。その一つ、ムガル・インドにおける封建的土地所有にかんする論文（1952年にモスクワで出された書物の一部）は、スターリンが、『ソ連における社会主義の経済的諸問題』（1952年刊）のなかで示した「もちろん、経済外的強制は、農奴制的地主の経済的権力を強化するうえで役割を演じた。けれども、封建制の基礎は、経済外的強制ではなく、封建的土地所有であった」とする規定を東洋諸国、とくにインドにおいて検証する必要があるとする序で始まっている[22]。この文章は、スターリンの発言後まもなく書かれており、詳しくは論文、あるいは原著の正確な理解を待たなければならないが、スターリンの生きていた時代、その歴史研究への示唆がアントーノヴァ、あるいはソ連の歴史研究者に重くかかっていたことを推察できる。

最後に、この「思い出」の邦訳を快く認めていただき、アントーノヴァ教授についてご教示くださったスレンドラ・ゴーパール教授に感謝の意を表わしたい。アントーノヴァ教授の業績を記念する論集が2010年にモスクワから出版されたことも付け加えたい。

注

1 桑島昭「会議派社会党—「民族戦線と階級戦線の結び目」—」『国際関係論研究』3号 1968年10月。

2 Leonid Mitrokhin, "A Triple Trap: Story of Three Indian Comintern Activists in the years of Stalinist Terror", *Soviet Land,* No. 4, April 1991, cited in Nirode K. Barooah, *Chatto-The Life and Times of an Indian Anti-Imperialist in Europe*, Oxford University Press, New Delhi, 2004, p. 321. ミトロキン論文は未見。

3 Barooah, op. cit., p. 326, fn. 36.

4 Gene Overstreet and Marshall Windmiller, *Communism in India*, University of California Press, Berkley and Los Angeles, 1959, pp. 110-1, and Muzaffar Ahmad, *The Communist Party of India and its Formation Abroad*, National Book Agency, Kolkata, 1962, p. 94. なお、ビカネール出身のウスマーニーについては、Girdhari Lal Vyas, *Shaukat Usmani-Vyaktitwa evan Krititwa*, Rajasthan People's Publishing House, Jaipur, 1996 も参照。

5 David N. Druhe, *Soviet Russia and Indian Communism 1917-1947- With an Epilogue Covering the Situation Today*, Bookman Associates, New York, 1959, pp. 95-6.

6 Adhikari (ed.), *Documents of the History of the Communist Party of India*, Vol. 1, 1917-1922, People's Publishing House, New Delhi, 1971, pp.21-2, pp. 131-9, and pp. 221-2. オーバーストリートとウインドミラーは、第6回大会のインド人参加者の仮名と本名の対照表で、Mahmoud をMohammed Shafiq(?)とし、Raza(sometimes Rasur)については（？）を付けて不明としていた（Overstreet and Windmiller, op. cit., p. 111, fn. 29)。スペルはともに原注のまま。

7 この2人については、Ahmad, op.cit., pp. 75-6 も参照。

8 ウルドゥー語部分の英訳については、Adhikari, op. cit., pp. 135-9 を参照。

9 Sohan Singh Josh, *Hindustan Gadar Party-A Short History, Vol. 2: Towards Scientific Socialism*, People's Publishing House, New Delhi, 1978, pp. 234-6.

10 Adhikari, op. cit., p. 233.

11 Ibid., p. 249. ただし、イギリスの情報網の手に入ったローイ夫人、エヴリンの手紙のなかで挙げられたインド人学生17名（ここでは、ムザッファル・アフマドの推定した17名ではあるが）のなかにシャフィークの名はない（Ahmad. op. cit. p. 78, fn.)。

12 G. Adhikari (ed.), *Documents of the History of the Communist Party of India*, Vol. 2, 1923-

1925, People's Publishing House, New Delhi, 1974, pp. 38-9.

13 Ahmad., op. cit., pp. 94-5.

14 Adhikari, op. cit., Vol. 1, p. 222.

15 Overstreet and Windmiller, op. cit., pp. 115-21 and Druhe, op. cit., pp. 96-7.

16 Adhikari, op. cit., Vol. 1, pp. 24-8 and pp. 215-20, and Gautam Chattopadhyay, *Abani Mukherji-A Dauntless Revolutionary and Pioneering Communist*, People's Publishing House, New Delhi, 1976, 56 pp.

17 「事項16　亡命印度人ノ追放問題一件」『日本外交文書』大正４年第１冊　外務省　1966年　563－４ページ。

18 同567ページ。なお、ボース、バグワーン・シン、ムケルジー三者の関係については、中島岳志『中村屋のボースーインド独立運動と近代日本のアジア主義』白水社　2005年　67－８ページ　に述べられた内容とも一致している。

19 Chattopadhyay, op. cit., pp. 13-4. 1915年２月にシンガポールで起こったインド兵の反乱の弾圧に日本の海軍と在留日本人社会が加わった記憶は新しく、日本人漁師の態度に影響を与えた可能性はある。1969年に行なわれたインタビューで、アバニ・ムケルジー夫人のローザ・フィティンゴフも、日本人船員がムケルジーをボートに救出したと語っているが（p. 53)、1924年にコロンボからイギリスに向かう船で偶然ムケルジーと乗り合わせた芸術家アトゥル・ボースが1969年に語り、インタビューの記録もチェックしたという資料では、Javanese fishermenに救出されたとなっている（p. 42)。そのすぐ後にIndonesian Muslim boatmenの表現もあり、Javaneseのvはpの誤記と推測されるが、確認の必要がある。

20 Ibid., p. 53.

21 Adhikari, op. cit., Vol. 1, pp. 219-20.

22 K. A. Antonova, "Die Hauptformen des feudalen Grundbesitzes im Mogul-Indien des 16 Jahrhunderts", Walter Ruben (ed.), *Die ökonomische und soziale Entwicklung Indiens-Sowjetische Beiträge zur indischen Geschichte*, Band 1, Akademie Verlag, Berlin, 1959, p. 13. なお、封建制についてのスターリンの発言については、スターリン全集刊行会訳『スターリン戦後著作集』大月書店　1954年　251ページ参照。

追　記

本稿提出（2011年７月）後に必要になった最小限の補足をここに加えたい。

アバニ・ムケルジーが日本で会ったインド人のうち、ビノイ・クマール・サルカール（Benoy Kumar Sarkar 1887-1949）は、経済学者。20世紀初頭のベンガルの民族教育運動に参加。1906年から、ベンガル民族カレッジ・民族学校で教え、とくに低学年の生徒向けの教授法を工夫し、教育理論を深めた。1910年代からは多くの雑誌の編集を手がけている。1914年から15年にかけてヨーロッパ、アジア、アメリカを旅行し、大学などで講演した。

シバプラサード・グプタ（Shivaprasad Gupta 1883-1944）は、大地主で、パンディット・マダン・モーハン・マーラヴィーヤの影響を受け、インド国民会議派への献金のほか、バナーラス・ヒンドゥー大学に巨額の寄付をしている。第一次世界大戦後の非協力運動の時期に民族教育の機関、カーシー・ヴィッディヤピートの創設者（1921）になり、またヒンディー語紙『アージュ（Aaj）』を創刊した。1914年から1916年にかけて海外旅行をしており、日本にも滞在した。

1915年は、ラーラー・ラージパト・ラーイをはじめとして多様な考えをもつインドのナショナリスト、革命家が日本に集まった年である。

（以上、S. P. Sen, *Dictionary of National Biography* のほか、Haridas Mukherjee and Uma Mukherjee, *The Origin of the National Education Movement (1905-1910),* Jadavpur University, Kolkata, 1957, pp. 86-7; Chintamani Shukla, *Gandhi yugin Swatantrata Sangramon men Uttar Pradesh ka Yogdan,* Shukla Prakashan, Mathura, 1988, p. 338; Feroz Chand, *Lajpat Rai-Life and Work,* Publications Division, New Delhi, 1978, pp. 271-81 を参照。）

なお、UP州の会議派指導者カムラーパティ・トリパーティーの自伝には、ガンディーがヴィッディヤーピートの定礎式を行った広場で、サンニャーシー（修道僧）の農民指導者バーバー・ラームチャンドラ（Baba Ramchandra）が地主層＝タールクダールに反対する集会を開いたことを興味深く記している。ラウドスピーカーのなかった時代に、農民集会開催の合図は手拍子によって伝えられていた（Kamlapati Tripathi, *Swatantra Andolan aur us ke bad,* Rajpal and Sons, Delhi, 1991, pp. 66-7）。

第一次世界大戦後におけるインドの独立運動の農民への広がりを象徴するシーンである。

Recollection of Personal Encounters with Indians in the USSR in 1930s-40s

K. A. ANTONOVA*
Translated by Sho KUWAJIMA**

This is a Japanese translation of the recollection of Professor K. A. Antonova, an eminent Russian historian, dictated by Professor Surendra Gopal originally in Russian in 1999. Here I am using its English text which appeared in *The Social Engineer-A Journal of International Perspective on Development,* Vol. 9, No. 1, January 2000, published in Patna.

Professor Antonova spares most of her talk to personal encounters and discords with two Indian communists, Reza and Abani Mukherjee.

Antonova presumes that Reza was a Hindu from South India. Reza made his speech in the 6th Congress of the Comintern. However, G. Adhikari writes in *Documents of the History of the Communist Party of India* that his real name was Mohammad Shafiq. If Adhikari's explanation is correct, this interview is an important document to know the personal history of a *Muhajir* turned communist who participated in the meeting of the Communist Party of India formed in Tashkent in 1920.

Abani Mukherji is more well-known in the history of the Comintern. Antonova's feud with Abani Mukherji in the Times of Great Terror in Russia took a tragic turn. Antonova was banished to 'an outlying place in Siberia', and Abani Mukherji faced death sentence. In this recollection Antonova observes this feud in the broader context of Russian history, and finds Abani Mukherji as an Indian freedom fighter who was entangled with the

---

* K. A. Antonova was Professor of the Institute of Oriental Studies, USSR Academy of Sciences.
** Professor Emeritus, Osaka University of Foreign Studies

political confrontation in Russia. Here my post-script in Japanese tried to examine two visits of Abani Mukherji to Japan before he was known as a communist.

In this talk we can have a glimpse of two other Russian scholars who worked on Indian history, Nikolay Goldberg, and Igor Reisner. Also, we can confirm how the USSR in the first half of the 1930s depended on 'immigrant' revolutionaries and scholars in grasping the world situation, and Asian situation in particular.

Professor Antonova says that her recollection will be interesting to some Indians. She passed away in 2007. Actually this document can be said a testamentary letter addressed to the later generation. Why a stanza from Saadi's *Bustan*, "Happy should he be, who lived even a day longer than his foe" became a reality in the age when the meaning of the 'internationalism' was discussed? This is the question submitted by Professor Antonova.

Lastly I would like to express my thanks to Professor Surendra Gopal who kindly gave me his permission to translate this precious record into Japanese, and also provided me useful information on the life and work of Professor K. A. Antonova. The Memorial Volume of K. A. Antonova edited by L. B. Alayev and Tatiana Zagorodnikova was published in Moscow in 2010.